
即興小説傑作集 第一弾

物書き魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

即興小説傑作集 第一弾

【Nコード】

N3417B

【作者名】

物書き魂

【あらすじ】

出された単語を使用して即興小説を書こう、そんなスレッドが「小説家になろう」秘密基地」に存在する。絶対には使用しなければならぬ単語は三つ、文字は1000文字までという極限の制限の中で生まれた豊かな作品集です。

前編（前書き）

この作品は、「小説家になろう」秘密基地」掲示板の「即興小説を書こう！」スレッドから生まれました。全ての著作権は作者様に属します。

「冬・雪・マフラー」

作者・更紗ありさ（W3245A）

「携帯・メール・クリスマス」

作者・影之兎チャモ（W6270A）

「山・乙女・魔法」

作者・AKIRA（W7051A）

「夜中・畳・絵本」

作者・影乃兎チャモ（W6270A）

「空腹・世界・娘」

作者・マグ口頭

前編

「冬」「雪」「マフラー」

作者・更紗ありさ

「あ」

マフラーを編んでいた手を止めて、僕はふと窓の外を見上げた。紺色の作り物みたいな空には銀の月だけで、星は一つも見えない。晴れているのか、いないのか。天候さえも曖昧に隠した夜闇に、突然白い光が落ちてきた。

「雪だよ、サエ」

「本当。もう冬なんだね」

雪は蛍のように淡い光を発しながら、はらはらと空を舞っている。その様子を楽しげに見ていたサエは、ふと僕が編んでいるマフラーの端を軽く掴んだ。ピンクと黄色　彼女の好きな色で編んだマフラーは、秋頃から頑張ってきたせいかな、もうすぐ完成しそうだ。

彼女の満足そうな笑みに、思わず僕もにこりと微笑む　が。

「早く編み終わってね。クリスマスデートにはそれをしたいたんだから」

その彼女の何気無い一言に、僕の顔が少しこわばる。

彼女の事は好きだ。大好きなだけけれども……

「……うん。でも」

立場が逆じゃない……？

そう続けようとして結局飲み込んだ僕と、とても嬉しそうな彼女を、

雪の明かりが優しく照らしていた。

「携帯」「メール」「クリスマス」

作者・影之兎チャモ

本日は開校記念日。ごろついていたら、携帯が震えた。

めずらしい。休日にメールなんて。予定は平日に決めるし、急な呼び出しは大抵電話。誰かと目を通し、途端に、心臓がはねる。

片想い中の女の子だ。内容は更に鼓動が激しくなるもの。

「クリスマス空いてる？」

え、俺に恋人がいないことは知っているはず。もしかして誘われてる？

どぎまぎしながらメールを返す……空いています。

すぐに返ってきた。

「クラシック好き？」

まさか誘われているんじゃない？

もちろん俺は即答した。大好きです、と。

彼女の返事も即答だった。

「コンサートに行きませんか？」

キタよ、間違いないよ！俺は思わず部屋中を乱舞した。ようやく春が来たのだ。震える手を押さえ、もちろん、と押す。

「よかった、急にバイトが入って困ってたんです。私の彼が相席することになりますけど頼みますね」

……その日から俺の長い開校記念日が始った。

「山」「乙女」「魔法」

作者・AKIRA

いつからだろうか。このうら若き乙女に恋をしたのは…。

登校の時に会う名前も知らない彼女はいつも同じ時間、同じ電車、同じ車両に僕と乗り込む。

何気無い仕草に心奪われ、魔法に掛かった様に視線を彼女に向けたまま固まってしまふ。

別に美女という訳ではない。胸の二つの山も申し訳程度。スタイルも何ら特別な所はない。

なのにどうして彼女がいいのか、自分にもわからない。自分で言っていて意味が分からないが。

ただ本当に言えるのは、この胸の高鳴りは嘘じゃない。

彼女が好きになった理由を彼女が卒業するまでに見つけることが出来るだろうか。それも分からない。

「夜中」「豊」「絵本」

作者・影乃兔チャモ

七歳になる娘へのクリスマスプレゼントを男は熟孝した。娘に尋ねても欲しい物などないと言う。そればかりか、サンタは父、夜中に寝室に入るようなまねはするな、と言う。

小学生に上がり、変にませた娘。それならばと余計に力が入った。考えた末、娘が本屋で気にかけていた、吸血鬼の絵本にした。

聖夜、子どもには起きれない時間帯まで待つと、男は娘の眠る和室に忍び込んだ。枕元に絵本を置く。後は妻に自分は寝ていたと証

言させ、サンタを信じこませよう。そう思いつつ、娘をみた。

が、そこには娘はいなかった。否、娘によく似た、目が赤く牙の生えた化け物がいた。

「だから言ったのに」

次の瞬間、畳に男の血が飛び散った。

「空腹」「世界」「娘」

作者・マグロ頭

「世界は真つ暗だ。世の中は偽善と虚無の友情ばかりで夢も希望もない。つまらないんだよ、基本的に。」

なあ、本気で伝えたいことを伝えあえる友人がいるか？ 嫌なことを面と向かって言える恋人がいるか？ いないだろ。いないんだよ。

……みんな一人なんだ。孤独で寂しくて怖くて……だからみんなに合わせて、嘘の表情と言葉を並べて安心しようとするんだ。

だけどなあ俺あ嫌なんだよ、そんな人生。誰とでも真剣にぶつかりあいたいんだ。真剣に向かい合いたいんだよ！

……でもなあ、そんな生き方したら社会から弾き出されちまうんだ。あいつはおかしい。異常だ。気持悪いって。こないだ娘に言われちまったよ……父さん、うざいって、どっか消えてって。昔はあんなじゃなかったのになあ……いつの間にかあんなになっちまって……。何だかチャラチャラした男と付き合ってるし……。

……なあ、俺がおかしいのか？ 本気で向き合うことは駄目なのか？ ああ……チクシヨウ……！ もう何を信じたらいいか分かんねえよ……」

デスクに突っ伏して泣き始めた元上司を慰めながら、早く家に帰

って飯を食べたいと思う私だった。

後編（前書き）

収録作品の紹介

「ライメン」「死体」「パンチラ」

作者・影之兎チャモ（W6270A）

「カレンダー」「緑」「映画館」

作者・マグロ頭

「女子高生」「十字架」「雨」

作者・Yoshina（W6046A）

「黒」「窓」「ベッド」

作者・マグロ頭

「母ちゃん」「内緒」「休み」

作者・更紗ありさ（W3245A）

「扇子」「雪」「本」

作者・AKIRA（W7051A）

後編

「ラーメン」「死体」「パンチラ」

作者・影之兎チャモ

- - - - -

主人は殺人鬼であり、裏世界でその名を知らぬ者はいない。殺した人間の数もさることながら、女性美を極限まで体現させたその美貌と挑発的な姿は、誰もが口にせざるおえない。

今日も主人にひれ伏すように死体が山となる。ひっくり変えされたラーメンのように中身が撒き散らされ湯気を立てる屍達は、死して何を思おう。

主人は天使のように微笑むと、短いスカートをつまみあげた。パンチラ、それが彼女から彼等への餞なのだ。

さて、未来の屍諸君。死の淵でまた会おう。私の名はまだ言つまり。主人の前に這いつくばり首をあげれば見える、逆三角形のアイツ、とだけ伝えておこう。

「カレンダー」「緑」「映画館」

作者・マグロ頭

- - - - -

日曜の朝。平日より遅くに響きまくった目覚まし時計を蹴飛ばして止めた私は、上半身を起こしてぼーっとしていた。

そのまま十五分、一向に目覚めを実感しないまま時間だけが流れ

ていく。ふと、まるで糸を引かれたように私は壁にかかるカレンダーを見た。

ん？ 何か滅茶苦茶強調してある日がある…… 『映画館』……何の事だあ？

疑問だらけの思考。でも、それを見ているうちに、私の頭は妙にはつきりしてきて、同時に変な焦りが沸き上がってきた。

『映画館』……確か誰かと行くつもりで……そう、緑だ。ずっと見たいって言うってた。……つまりあれは緑と映画を見に行こうって予定な訳で、その予定日と言つのが……

「今日じゃない！」

思わず声をあげると、私は布団を跳ね飛ばし起床。準備に取り掛かった。

「あ~~~~っ、もう！ 何で忘れてたのよ、このバカっ！」

急いで服を着替えながら私は自分にダメ出しをした。いくら昨日彼氏に振られて自棄酒したからって、忘れちゃ駄目だろ！

しばらくバタバタした後、私はトーストをかじりながらアパートのドアを開けた。旧友との久しぶりの再会に自然と笑顔になりながら。

「女子高生」「十字架」「雨」

作者・yoshina

.....

女子校というところには何か魔物が棲んでいる様に思える。

共学にはない何かがあるのだ。

男子校には縁が無いのではつきりとはいえないが、

同性ばかりで青春を過ごすということには非常に危うい面があるのかもしれない。

どしゃぶりの雨が振る夕方。

教職の件で久しぶりに母校の女子校に行くと、隣接した教会の門が少しだけ開いていた。

在学中ミサ等で使った所だったので足を伸ばしてみる。

しかしドアを開ききろうとしてその手を止めた。

中には女子高生が2人で長いすに座ってなにやら話していたからだ。ただ話していただけ。

だがそこには共学の女子には無い曇った雰囲気があるように見えた。十字架の前で仲良く談笑する少女達。

一見絵に描いたような光景にも関わらず、それはイエスからするとあまり歓迎できる場面ではないのが皮肉だ。

私は中へ入らず静かに教会を後にした。

そしてもう一度その建物を見上げる。

卒業したら彼女達も気付くだろう。

ここには少女を狂わす魔物が居ることを。

「黒」「窓」「ベッド」

作者・マグロ頭

- - - - -

夜は真っ暗な方がいい。人工の光で照らされるよりも、自然の光が生み出す闇の中でじっと息を潜める方が素晴らしい。

確に初めは孤独で怖くて逃げ出したくなる。闇は自分の小ささと弱さを顕著に現すから。でも、見上げた夜空には、煌めく星たちと優しく光る月がある。同じ様に晴れた夜空なら、同じ景色を何処でも見る事ができる。

それに気づければ、案外間は優しい。

町の街灯が消え切る頃、僕は二階の窓から外の様子を見た。真っ黒に染まりつつある町並は、月明かりに照らされて原始の夜となっている。

暫くして、遠くの夜空に一筋の光が走った。

「始まったぞ！」

何処からともなくそんな声が聞こえた。言葉の通り、始めの一つを皮切りに次々と星が流れてく。僕は近くにあったベッドに腰かけた。

君もこの空を見てるのかなあ？

知らない誰かが、知っているあの人が、同じ空を違う場所で見ている。誰かは笑っているのかもしれない。あの人泣いているかもしれない。でも、みんな同じ空を見ている。

独りじゃない、そうなんだろう？

もう会えないあの人にそっと微笑んだ。

「母ちゃん」「内緒」「休み」

作者・更紗ありさ

- - - - -

僕の母は、常に機嫌が悪い。大好きな韓国人俳優がテレビに出てこなかったとか、大抵ろくでもない理由で怒っている。

「ねえ」

そして今日も母は大層機嫌が悪かった。

僕はゲーム画面から視線を外さなのまま、黙って母の次の言葉を待つ。

「今日も学校休んだの？」

「うん」

「また内緒でカラオケ行つたの？」

「そう」

僕が学校に行かない事なんて、もう一年前から当たり前前の事だった筈なのに。

僕はゲーム機をテーブルに置いて、ちらりと母を見た。

母の目には涙が浮かんでいる。

「田中さんの奥さんから、聞いたのよ……」

田中さんは、今朝井戸端会議に混ざった時にいたおばさんだ。僕が学校をさぼつたのも、彼女から聞いたに違いない。

他に何を伝えたのだろう。

気丈でプライドの高い母が涙を浮かべる事は珍しく、僕は急に不安になった。

「母さん、田中さんから何聞いたんだよ？」

「お母ちゃん」

「は？」

「あなた、私の事お母ちゃんって呼んだのね！ 今時お母ちゃんなんて呼ばれたら、恥ずかしいでしょ！！」

……ほら、母さんは大抵ろくでもない理由で怒っている。

僕はがつくり肩を落とした。

「扇子」「雪」「本」

作者・AKIRA

- - - - -

あれは小学生の頃の話。

ある雪の降る日、掃除を終え、一人家路についていた時、

「寒いなあ。早く帰ってコタツで寝よ」

そんな事を言いながら、公園の前を通りかかった時、公園の真ん

中に誰かがいるのに気付いた。

「ん？なんだあれ」

その格好は長い黒髪に白い着物を着て、素足で佇んでいる女性がいた。

あんな格好で大丈夫なのかと思っていると、着物から取り出した扇子を持ち、踊り出したのだ。

まるで楽しむ様に、そして優雅に踊っていた。これは多分『舞』
と言うやつだろうとわかった。ついこの前に国語でこんなのをビデオを見たからだ。

見とれていると、ふいにこちらを見た。

すると次の瞬間にはその女性はいなくなった。

あの時見た女性は何者だったのだろうか。もしかしたら雪を降らせていたねかもしれない。

後編（後書き）

即興小説傑作集第一弾、いかがだったでしょうか？ 心に残る作品があった、という方は作者様の名前を添えて感想を送ってくださいね。もし作者様が小説家になろう登録済みでしたら、作者様個人のメールフォームなどにどうぞ。

また、即興小説の活動は現在も「小説家になろう」秘密基地」のみんなの掲示板にて行われています。傑作集には収録されていない作品もありますので、ぜひご覧下さい。参加もお待ちしております。

それでは、今回参加していただいた方々のご紹介を最後に添えさせていただきます。

マグロ頭さま

AKIRAさま（W7051A）

yoshinaさま（W6046A）

更紗ありさま（W3245A）

影乃兔チャモさま（W6270A）

ご協力、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3417b/>

即興小説傑作集 第一弾

2010年10月10日17時10分発行